

一有である非想非非想処 (naiva-saññā-nāsaññā-āyatana) の報果 (vipāka-phala) を成じる思が、世善中の最大の果 (mahā-phalatama) を招くと説く。」とされる。このように無間業の最大罪は破和合僧とされ、世間の善の最大果は、非想非非想処の報果を成じる思とする。それらの理由として一七二偈の長行には、「これを最悪となす。法身 (dharma-sarīra) を転ぜず以ての故に。」(大正二八卷八九九頁中段一五行から一六行)。「未だ超昇離生せざる者は超昇離生せず、亦、得果も無く」(中段二〇行)と述べ、最大罪として破和合僧は、仏の法身を転ぜず、世間の解脱の道を障するによってである。また、「彼の思は永く一切の煩惱を断じて得果するを以ての故に。」(大正二八卷八九九頁中段二九行から下段一行)と述べ、最大果としての非想非非想処は、八万大劫の間、得果して極寂靜であるによってである。『俱舍論』で『雑心論』の相応するのは、業品一〇七偈とその長行(大正二九卷九四頁中段二行から二〇行)である。この漢本に相当するプラダン本の梵文 (『AKI』は、二六四頁二行から一九行である。また梵文『称友疏』(萩原本『AKV』)では、四三〇頁五行から一六行である。『俱舍論』漢本と梵本とも、『雑心論』と相違しない。ただ無間業の罪の重さを、順序だてて説明している。「余の無間の罪は其次第の如く。五と三と一と、後後に漸に軽く、第二は最も軽し。恩等少きが故に。」(大正二九卷九四頁中段一〇行から一二行)。このように、破和合僧が無間業中で最も罪が重く、次いで第五の出仏身血、第三の殺阿羅漢、第一の殺母の順で軽くなり、第二の殺父は恩等が少ないので最も軽いとされる。『順正

理論』は「無間地獄の一劫の異熟を招く。」(大正二九卷五九〇頁上段九行)と延べ、『雑心論』の「法輪を転ぜず」の補足をしている。

以上のことから『雑心論』『俱舍論』には述べられていないが、なぜ異熟果に約す最大果を説いたのか、と言えば、『順正理論』には「これを簡ばんがための故に、世の善の言を説く。」(大正二九卷五九〇頁上段二〇行)と延べ、第一有を簡ぶために説いた、とされる。なぜなら離繫果に約せば阿羅漢に達する、金剛喻定と相応する思が異熟果に約すと第一有の思であつて、最大の果を招くからである。またなぜ破和合僧が無間業 (ānantaryan karmā) の最大罪と説いたのか、については、無間業は業障 (karmāvaraṇa) のことであるから、聖道や善根の起るのを妨ぐ重大な障害であることを示すため、最大罪として破和合僧 (saṅghabheda) を述べたのであろう。

古代インドにおける支配について

—— vasa と vasa ——

杉岡 信行

バラモン教と紀元前五・六世紀の仏教・ジャイナ教興起時代の思想中で、ヴェーダ語・サンスクリット語の vasa とパーリ語・半マガダ語の vasa と、これらの派生語・複合語とが使用されている文脈に検討をくわえる。

『リグ・ヴェーダ讃歌』の第一〇巻、第一九〇讃歌はタパス (熱力) の歌である。その第二詩を引用する。「浪だつ大海より

歳(時間)は生じたり、昼夜を配分し、一切の瞬くもの(生物)を支配する(歳は)」「辻直四郎訳)。すなわち、浪だつ大海より生じた歳(時間)が、一切の瞬くもの(生物)を支配(vasī)するという内容である。

『アタルヴァ・ヴェーダ』(六、八六、二)から引用する。

「大海は潮流の所有者である。アグニは大地の支配者である。月は星々の所有者である。……」。D. Chand はアグニを太陽と訳すが、いずれにせよ大地の支配者(vasī)である。すなわち、神々あるいは上位者が下位のものどもを支配しているのである。

古ウパニシャッドの中からアートマンによる支配を見てみよう。「心臓の内部のこの虚空、そこに一切の支配者(vasī)として、一切の主として、一切の君主として、それは横たわっている」(BĀU. 四、四、一二、湯田豊訳)。それとは、不生のアートマンのことである。

仏教やジャイナ教は、右に見てきたバラモン教に反対して出現したのであるが、神による支配についても記録を残している。南伝上座部の『梵網経』等がそれである。「われは梵天なり。大梵天なり。全能にして打ち勝たることなく、何れのものをも見、一切を支配して、世界の自在主なり。すべてのものの創造主で化生主、最上の能生者、一切を制する主、已生、未生のものの父なり」(雲井昭善訳)。ここでは梵天と自在神とが同義であり、支配者は vasa-vati となっている。すなわち vasa という用語が神の属性を表すことを仏教は知っていたようだ。

さてここからは、支配を意味する vasa の用語を、初期の仏

教や初期のジャイナ教ではどのような文脈で使用していたのかを見てみよう。初期の仏典のひとつに『スッタニパータ』があり、その中でも最も古い第四章の第九六八偈から引用する。「怒りと高慢とに支配されるな。それらの根を堀つくしておれ。また快いものも不快なものも、両者にしっかりと、うち克つべきである」(中村元訳)。すなわち、自身の精神状態である怒り(kodha)と高慢(ātimāna)に支配(vasa)されてはいけなという言葉。怒りと高慢は煩惱(kilesa)と言い換えてもよく、もしそうであるなら自身の煩惱によって主体が支配されてはいけない。

初期のジャイナ教聖典のひとつに『アーヤーランガ・スッタ』があり、その第一編は最も古いとされている。そこから引用する。「人は老と死の支配に陥りやすい」。すなわち、老(jara)と死(maccu)の支配(vasa)に陥るのが人の常である。煩惱の支配(kilesa-vasa)という複合語が初期仏典『ジャータカ』等に散見される。

以上の検討から何がいえるのか。バラモン教では支配の主体は、先ずは神や上位者である。仏教やジャイナ教では、煩惱などの支配の原因が、その人の主体の中に存在するであろう。

一 闡提について

南部 千代里

一 闡提は、サンスクリット語 Icchantika の音訳で、大乘の